

能『三笑』

□配役	シテ(慧遠 <small>えおんぜんじ</small> 禪師)	松山隆雄
	ツレ(陶淵明 <small>とうえんめい</small> )	会田 昇
	ツレ(陸修静 <small>りくしゅせい</small> )	梅若紀彰
	子方(舞童)	松山絢美

□あらすじ

晋の慧遠禪師(シテ)は、廬山に隠棲して三十余年も山を出ない。十八賢人らの同士と白蓮杜を結んで世を捨て、ひたすら仏道修行に励んでいる。

十一月のある日、詩を詠み酒を飲む友、陶淵明と陸修静が訪れた。廬山の石橋を渡り、巖に腰をかけて共に瀑布(大きな滝)を眺め、その壮大な絶景を賞して酒を酌むのである。

飛沫の林は梢に向かって夏の雪を見るようであり、瀑布の壺に落ちて石を打つ音は春雷のようだ。銀河の水は地に落ちて再び天に昇り、まるで天地を昇降するようである。

もともと、陶淵明は彭沢の令となったが権力に従う事に堪えられず、わずか八十日余日で官を辞し、日夜酒を愛して松菊をなぐさみとした人だ。また陸修静も神仙の術を学んで陸道子といわれ、後には此の山の簡寂観に隠居した人だ。

三士の談話はすべて詩の世界を彷徨させ、酒に酔い、面白さも増して時の移るのも忘れ、共に舞う(相舞ノ楽)のである。

やがて宴もやみ、橋を渡ろうとした慧遠は足もとがふらついてよろめいたので、陶淵明・陸修静の二人は左右からささえた。慧遠はますます興に乗じて戯れて、知らないうちに虎溪の外へ遙かに出ていた。それを気づいた陶淵明に「長年の禁足を破るのか」と注意されて、三人は一度にどっと手を拍って大笑いする。

○ 観世流では珍しく、子方の舞が入ります。

子方は隆雄の孫・松山絢美がつとめます。

○ この能は、あの有名な故事『虎溪三笑こけいさんしょう』を題材としています。

三人が笑っている姿の水墨画『虎溪三笑図』があります。

○ 能ではまれに見る「笑い」を取り入れていて、朗らかで清らかな終演です。